

読・書・漫・遊

愛・蔵・秘・蔵・こ・の・3・冊

3books

人それぞれに本の読み方があるだろう。
必要に迫られる読書、楽しく心に潤いを与えてくれる読書……
企業人にとっての読書の存在とは。

◎今月の選者

黒川 清

日本学術会議会長

『中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義』

(中島岳志著、白水社)

『喪失の国、日本』

(M.K.シャルマ著、山田和訳、文春文庫)

『人間の安全保障』

(アマルティア・セン著、東郷えりか訳、集英社新書)

インドの深みを知り 日本を見つめ直す

中国とともに、アジアの成長の中心と目されるインド。欧米、中国などのアジア諸国、ブラジルなどのラテンアメリカ諸国、そしてイスラム諸国への理解に比べて、日本はインドを理解しにくいのだろうか。インドを訪れると、「ハマル」人と2度と行かない人に分かれるとも聞く。仏教はインド発といえ、日本にとっては中国経由であり、歴史的に見ても日本とインドの関係は実質この100年程度である。

インドには、普通の枠では考えられない深みが感じられる。それは、インドという自然環境に育まれた文化、社会、歴史的背景から生まれるのであろう。また、英国支配の中で社会構造の影響も考え

られる。インドといえば、偉大な指導者ガンジーを思い浮かべる方も多いだろうが、このような背景からあらうような人物が誕生するのだから、日本人のカレーライス好きは、インド独立の闘士であるラーース・ビハリー・ボースがもたらした。『中村屋のボース』は、ベンガル民族運動の指導者ボースの波乱万全の一生を描いたノンフィクションだ。ボースは、日英同盟下の日本に逃じた際に、新宿の中村屋にたむかされた。本物のカリの作り方を教えた。中村屋店主の相馬愛蔵、黒光夫妻はボースをかくまっただけでなく、その娘である俊子とボースは結婚する。当時の状況を考えれば日本の助けた人たちが腹が据わっている。

今年の1月ダボス会議でインドの財務大臣と朝食の機会があった。表紙にボースの顔写真が出ているこの本を見せ、「この男が日本に本物のカレーを教えたのだ」と紹介したら「それはすばらしい。チャンドラボースではないボースなのですね?」
4月、アジア学術会議開催中で31デリーを訪れた。その際に、インド人の方と結婚している日本人女性にお会いした。「喪失の国、日本を知っていますか?」と尋ねたら、「インドに住む日本人にとって、バイブルのようなものです」と答えられた。

インド大好きな訳者、山田和氏が書いた「訳者の序」が面白く、また「訳者による解説」がしみじみとする。1人のインド人ビジネスマンから見た日本の食事、マシヨス、小社会、ビジネス、付き合ひ、旅順、自然への美的感覚、日本の文化など、さまざまな見方を知ることができ、そして何より、インド人の心の捉え方、考え方が新鮮で、驚きを隠せない。

『日本の新聞記事は事件中心で論評に乏しく、非個人的で、外見の記事に終始し、個性、報道というように報告だ、帰納的論法や見識が排除され、署名記事や論説委員による記事の割合も少ない』(8章から)
『日本人は、努力そのものに価値を見出し、目的話もなく「頑張れ」を頻発する。したがって、目的よりも体面や手段のあり方に拘泥する。一方、インド人は目的のためにあらゆる手段を講じ、いかなる場合にも目的と手段を混同する』
とはない。この文化的違いがビジネス上にも濃厚に出るにちがいない。『日本人の考える国際人としての資格には「正義」「判断力」「批判能力」という紳士に欠かせない美德が抜け落ちている』(13章から)
『日本人は人間であり、社会的関係を擬人化したもので、そこに入っていくのが「恥」の概念のため、欧米のような「個としての権利」は持たない。インドでは、個人としての人間性や宇宙的存在としての普遍性、カースト社会の業(カルダ)的存在において人間がある』(21章から)
最終章「日本が失ったもの、インドが失うもの」は日本人のインドへの理解とビジネスに資するだろう。



●『中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義』(中島岳志著、白水社) ●『喪失の国、日本』(M.K.シャルマ著、山田和訳、文春文庫) ●『人間の安全保障』(アマルティア・セン著、東郷えりか訳、集英社新書)